

Title	西洋音楽史概説(飯田忠純著, 音楽世界社発行)
Sub Title	
Author	村田, 武雄(Murata, Takeo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.171(511)- 175(515)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

西洋音楽史概説

(飯田忠純著
音楽世界社發行)

音楽史は各時代、各種族、各地方に於る文化の發達史と密接な關係を持つて居るもので、音楽だけの歴史を孤立的に確立させる事は不可能である。自然の發生するリズムカルな音響を以て、一つの音楽的形態であるとする原始音楽史家の觀點からすれば、恐らく人類の發達史、又文化史の中に於て音楽ぐらひ廣範圍の時代に亙つてゐるものはないであらう。

従來の音楽史は多く音楽の發達に關する調査の系列で、勿論その中には音楽技術、音楽理論、作品、樂器、演奏等の純理的な研究も含まれてゐるが、一般には文化的、又地方的な關係から見た歴史が多かつた。従つて純理的な方面に於ては、普通歴史に於る特殊史の如く一方面を誇大化して詳述したものが多し。之れは近代の音楽史に於て顯著に見られる處である。又一方文化社會史的方面から見た音楽史は、ともすれば地方史風のものか又は個人の傳記體のものとなる傾向があつた。飯田氏はいはばこの兩者を綜合した立場に立つて、古代西洋音楽の原流から現代音楽の主潮の據つて來る處を明かにし、併せて明日の音楽をも推定しようといふ大なる抱負のもとに筆を執つて居る。故に茲には音響、言語、旋律、和聲、節奏等の純樂典史をも發見し得ると共に、一方社會

學、民族學、心理學、美學等の觀點からした批評精神をも窺はれ、併せて之れを綜合してヨーロッパ文化の傳統に據つた著者の世界觀をも見る事が出来る。

私はこの著を音楽史として興味を覺える前に、各章各節に織込まれて居る著者の自己反省的な、又極めて東洋的性格の音楽史觀に心をひかれる點が多かつた。音楽史としては餘りに素材を多く取り過ぎた爲に、全體の統一、又一貫した立脚點がぼやけて居る嫌ひがあるが、之れをヨーロッパに於る音楽文化の發達を訪ね、それに一般歴史の立場から反省を試みたものとして見る時、著者の個性が一つの歴史的流れの中に種々な形態を以て發展して居るのに興味を覺えざるを得なかつた。所謂音楽理論家又純音楽史家の立場からではなく、一般歴史の研究家としての立場から音楽を歴史的に批判した點に、この著書の特徴があり、それが又この音楽史の生命でもある。之れはベツカアの音楽史の立場と同一で、音楽史一般を如何に見、且つ如何に理解すべきものかと云ふ全體を把握する目的を持った音楽史で、音楽史的知識を供給しようとする様な研究ではない。飽くまでも音楽の諸現象の史的變様に忠實な立場からその音楽現象に於る變様の過程を著者の廣い歴史觀で批判したものである。

著者は自己の音楽考察を次の五章に別けた。

- 第一章 西洋音楽の源流
- 第二章 近代音楽の前階
- 第三章 近代音楽の大成
- 第四章 近代音楽の展開

第五章 二十世紀音樂の動向

第一章の「西洋音樂の源流」に於て、著者は、音樂をば言語と意志の發達過程から起考し「身振り言語」の運動表出が如何にして音樂的感情の表現に移つて行つたかを説き、之れを以て音樂の生起《das Geschehen》として居る。之れは心理的に音樂の發生を考へる音樂史家の共通した立場である。私は著者があらゆる點でヴェントの民族心理學に多くの影響を受けて居る事を認めた。つまり自然民族の音樂生活に對する觀察から音樂の發達を説き出して居るのである。著者はこの章で西洋音樂の源流を古代東方の音樂にも基礎を求めてゐる。つまり、イラン地方、アルメニヤ地方又はアラビヤ地方等の歴史的地域に生じた音樂、即ちアツシリヤ音樂、ヘブライ音樂、ペルシヤ音樂、アラビヤ音樂、エジプト音樂又印度音樂を以てその一源流と見做した。且つ之等東西兩流は歐洲文化の黎明期に屬し、之等が相互に影響し合つて現代の音樂的形態の源をなしたものと考へて居る。そしてこの後にギリシヤ、ローマの音樂とアラビヤ音樂が源流を發展させたと考へる。著者の研究的態度は主として東方音樂の源流に基いて居る爲に、第二節の古代東方の音樂及び第四節のアラビヤ音樂の研究が最も深い造詣を示してゐる。殊に後者のアラビヤ音樂の研究は卷中の白眉である。概して第一章に於る著者の態度は、音樂の變様《die Metamorphose》に重きを置き、複雑なものが原始的なものより高い高場として意義を有するに至ると云ふ極めて普通の歴史觀に基いてゐる。

第二章「近代音樂の前階」は、中世紀からバッハに至る迄の音

樂を藝術様式を中心とした立場から述べて居る。從來の民族的な又地方的な音樂史的立場ではなく、綜合的に、ロマネスク音樂として中世紀初期から中期に至る單旋律音樂を綜括し、ゴテイク音樂としてヨーロッパ各地の音樂を複音樂の發達から主に音樂形式に基いて俯瞰したのである。從來の音樂史家は茲でキリスト教音樂のみを強調する傾向があるが、著者はケルト人やゲルマン人の間に發達した民族音樂の跡をも寧ろ同情的な立場で批判して居る。つまり、この時代の民族音樂が直接ワグナーの音樂に發展して行く過程を、音樂を離れた精神史的な立場から述べて居るのが面白い。次にルネサンス音樂のカテゴリの下にイタリヤの「新藝術運動」と音樂に就いて述べて居る。茲でも都市中心主義が如何に音樂の移植に影響を與へたかを一般歴史家の立場から眺めて居るのが興味深い。ただそれが如何に精神的思想的な交流をなして、各國民族に移植されて行つたかに就ては何等言及してない點が物足りない。著者は茲の記述にグレイの「音樂藝術史」の立場を模倣して居る。最後に樂譜と樂器の發達を極めて簡単に附加して結んで居る。總體に見て、この章の研究には、氏の獨創性が餘り出てゐない。寧ろ羅列的で特徴がない。

第三章「近代音樂の大成」は、やはり前章に於るが如く一般藝術形式の立場から分類して、バロック・ロココ藝術の表現を音樂の中に求め、之を自然認識の方向に向つた音樂として説明して居る。ガリレイやジョルダノ・ブルーノの天文學の研究がひいて茲に至つた、と云ふ廣大なむしろ餘りにも法外な類推が行はれてゐる。然しバロック・ロココの時代性を考へてその時代精神を、リ

リズムとダイナミックとトーン・カラーとの三要素の高揚に見出した観察は賢明である。著者はバッハとヘンデルをロココ藝術の音楽家として述べて居るが之れは彼等の持つ生活形態、又は宗教的な傾向を基とした考へ方で、彼等のあるものには確かにロココ藝術に見る様な色彩的な又情緒的な一面はあるが、バッハ、ヘンデルは窮極するところ形式の音楽家である。ただ彼等の個性がロココ的であつたと云ふに過ぎない。まして著者の云ふ如く、バッハ、ヘンデルはバロック後期の音楽とクラシック初期の音楽の過渡期をなすものではない。觀念よりも構成の重んじられた之等二人の音楽家を、ただ時間的に又時代的にバロック藝術のチャンピオンとしたのは餘りに音楽を感情化して考へたことになる。又音楽を鑑賞的立場から批判したことになる。私は著者の古代音楽に對する世界觀には共鳴する點が多いが、クラシック音楽つまり十七八世紀の音楽に對する解釋には賛成し兼ねる點が多い。第二節クラシック音楽に於ては主としてフランスのリュトリイ等を中心として述べて居る。つまり純粹器樂の作者を以てクラシック音楽の傳統をつくるものとして居る。その中心はハイドン、モーツアルトであると云ふ。そしてモーツアルトの音楽が官能的でエロティックであるとして云ふ事を以て、モーツアルトはすでにロマン主義音楽の前提であるとする。この一事をもつてしても著者が如何に感情的に音楽を解する人であるかがわかる。モーツアルトの音楽から愛の感情の要素を強調するのはロマン主義音楽史家の共通點である。著者はベートーヴェンを以てクラシック藝術の最高點とする。つまりベートーヴェンを一つの器樂形式の完成者として見て

居るのである。第三節に於てはオペラの發達を極めて常識的な見解から書いて居る。第四節では一種の近代音楽に對する結論の如き立場から、器樂形式の發達を綜括してこの時代の各作者の用ひた形式のすべてを列記し、併せて簡單な特徴を附加して居る。之れは一般音楽鑑賞に便利な研究である。

第四章「近代音楽の展開」は、ロマン主義音楽の歴史である。ジャン・パウル等のロマンティックの理想論を土臺として、ロマン主義音楽とは、「個性的な表現意欲を藝術一般の前面に押出して、形式的桎梏を脱化し、和聲上音楽上の手段を豊富にし、繪畫的色彩の効果を考へ、音楽を詩人的精神内容と結びつけようとするものである。」と云ふ立場から解釋批判して居る。之れは「統一されて居たものが國民的に分裂し、人間共存の理念のかはりに國民的に異なるものが強調される様になつた音楽」を以てロマンティックとするドイツ音楽史家とは異つた、寧ろ英國派の解釋である。非常に廣範圍なロマン主義音楽を僅か數十頁の間に纏める必要から、多くの列傳體となつた事は止むを得ないとしても、もう少し思想的に統一のある記述が必要である。これは、ウエーバーからワグナーまでの作曲家の特徴史である。第二節に「ワグナー主義」の下に、ワグナーの樂派を、後期ロマン主義の頂點として、精神的に又社會的に、又思潮的な展望からかなり詳細に掘下げて居る。私はワグナーの研究に著者が多くの嗜好と力とを注いで居ることを興味深く讀んだ。

第五章に於て結論として二十世紀音楽の一般を作者と作品を中心として述べる。つまりリヒャルト・シュトラウスの表題音楽を二

十世紀音樂の出發と見て、それに續くにロシヤの國民樂派、フランスの印象派、中部ヨーロッパの新即物主義の樂派、それにアメリカの大衆音樂派を以て終る普通の現代音樂史の記述法を構つて居る。ただ著者が二十世紀の音樂の一大主潮は、バッハの音樂の再檢討にあると云つて居るのに多くの共鳴を覺えた。單純化された音樂、透명한音樂を創造しようとする二十世紀音樂の向ふ所は、結局バッハに還り現代意識を以てバッハを再生する事になる。今日バッハの藝術を觀點とした十七八世紀以後の音樂史が盛に書かれる様になつたのは當然な結果である。又著者はダルベールの「ヴェリスモ運動」又ブゾーニー派の「コムメディア・デラルテ運動」等をも二十世紀音樂の重要なものとして擧げて居る。これは氏の一般歴史家としての廣い見界から生れたもので益する所が多い。最後に著者は、パリーのコンセルヴァトワールの校長であり、同時に優れた音樂史家、批評家であつたフランセスコ・サルヴァドール・ダニエルに就いて多くの頁を費して居る。これは恐らく著者が氏の研究に私淑して居た爲であらう。ダニエルの著「アラビヤ音樂」は、この種の權威と云はれて居るが、本著中のアラビヤ音樂の一章が卓越した記述である處からしても、著者に影響する處が多かつたことがわかる。

故飯田忠純氏が、慶應の史學科の先輩である事を知つたのは、この遺著を間崎先生から拜借した時が初めてであつた。もつとも音樂誌「音樂世界」や「月刊樂譜」誌上で氏の博學達識の音樂論に接しては居たものの、充分氏の音樂觀に就いては知つて居なかつたので、ただこの著書だけから氏の學說を考へて見る外はな

かつた。氏の音樂史に對する立場は常に文化的な社會史的な傾向を持つて居る。いはば音樂文化の歴史性をば世界史的に綜觀する立場である。従つて氏が研究對象とする音樂史の間口は非常に廣い。例へば第一章の西洋音樂の源流だけをとつても、若し氏の立場を充實させる爲には優にこの本著の全頁を埋むるに足る素材がある。恐らく氏が長生きすればなほこの音樂史を土臺として多くの發展を見た事であらう。又著者は、本著から見て、第一章の「音樂の源流」の研究を最も得意として居たと思はれる。中でも古代東方音樂、つまりアラビヤ音樂に造詣が深かつた様に思はれる。この著には研究目的となる材料が、實に豊富に盛られて居る。然しそれが充分消化されきつて居ない點を遺憾とする。殊にカマン主義から現代音樂にかけてその感が深い。然し音樂は時代の歌であり、歴史の華であるとすれば、音樂史は人間の生きた精神の統一であり、人類精神のすべての表現の連鎖の歴史でなければならぬ。つまり人間の喜びの歴史であり、同時に又人間の悲しみの歴史でもある。著者がともすれば感情的に音樂史を顧みようとする態度の中には、暖かい人間味と音樂をば心から愛し楽しんで居る、音樂を實際に生活して居た研究者の意氣が認められる。之れは學者的な態度ではないかも知れないが、兎角人間感情を没却した様な歴史となり易い音樂史をば、之れだけ面白く玩味させるのは著者の態度にただ音樂を歴史的に見ると云ふだけではなく、其處に人生觀的な又世界觀的な批判と享受の態度がはつきり出てゐるからである。イギリスのダイスン等の若い音樂史家が盛んに音樂を文化史的に批判して居る今日の情勢を鑑みると、氏

の早世は悲しみてなほ餘りある。(一九三九、二月)(村田武雄)

古代傳承研究

(肥後和男著
河出書房發行)

本書はさきに『日本神話研究』によつてわが神話學界に多くの貢獻をされた肥後氏の近業であつて、前書と姉妹篇をなすものである。たゞ前書が個々の研究の集録であるに對し、本書はわが神話において重要な地位を占めるスサノヲノミコトに關する一貫した研究であつて、まづ序説において研究態度についてのべ、ついで素戔嗚尊研究からその名義、その誕生、天眞名井に於ける誓約、素戔嗚尊の荒暴、高天原追放、八岐の大蛇、劍、素戔嗚尊の結婚、朝鮮との關係、大國主命に對する素戔嗚尊、後語の諸篇に分ち、この物語の重要な問題をほゞ究めつくし、いたるところ示唆にとんだ見解を提示して讀者を啓蒙するところの多いのは、まことによることばしいことである。著者の研究態度が神話と歴史との關係を究明することと、神話それ自身の歴史的發達を追尋することであるとされたのは、もちろん正しい態度として肯定されねばならない。たゞ評者は從來の多くの神話研究に對してその方法論上若干の疑問を有するのであつて、それは神話の原初的意義を究明する結果として、その源流にさかのぼり、各要素に分析還元するのは正しい方法ではあるけれども、しかし神話は還元された要素のみならず、それを統一綜合した全體としての形式においても意義を有するのではなからうか、もしさうであるとすれば、還元分析する以外に、更に全體としての意義を尋ねなければならぬ

書評

のではなからうか、また要素に還元してその原初的意義を究めるに當つて、今日の學者はあまり想像をたくましくして、過度の意義を附する弊がないであらうか、即ち原始人や古代人の意識以上に解釋しすぎる場合があるのでなからうか、また古神話の研究に民族學が利用されるのは最近の新しき傾向としてよることばしいことであるが、しかしこの際参照さるべき民間の傳承そのものの歴史がまづ考慮される必要はなからうか、今日行はれてゐる民間傳承がことごとく神話よりも古い起原を有し、原初的意義を有するとばかりはきめられないのではなからうか、或場合において中央において神話が固定化した後、それが地方に傳播し、或は派生したり、附會したりすることも考へられるのであるから民間傳承そのものの歴史を十分論證する必要はなからうかといふのである。かういふ疑問は本書においては比較的稀少のやうではあるものの、しかもなほ全く絶無とは言へない憾みがある。しかしこれは偏に評者の不明の致すところであらう。(本文三六八頁、定價三圓五〇錢)(松本芳夫)

大化改新の研究

(坂本太郎著
至文堂發行)

大化改新に關するまともな研究が今まで殆んど見られなかつたが、今回坂本氏が之を公にされた事は學會の爲めに喜ぶべき事である。著者はすでに多くの著書もあり、且つ此研究は學位請求の論文であり充分その價値を有するとして各方面に於てそのすぐれた研究を賞讃されてゐるのであつて、此處に再び本書への讃辭

(三五)

一七五